

田中美紀雄(タナカ ミキオ)
平成20年度2次隊 都市計画 ドミニカ共和国

プロフィール

長年勤めた地方の小さな都市での公務員生活を早期勸奨退職制度を利用し退職した、子供達の就職、身近な人の死、後進の育成などあった。“海外で働きたい”学生時代の夢がシニア海外ボランティアへの挑戦で実現でき嬉しい限りだ。

建築の技術者としていろんな仕事に関わった。若いころは営繕業務が多かった。晩年は許認可業務に従事した。一言で言うと建物が計画され建設され使用される、その過程の中の仕事に従事した。そんな経験が役に立てればさらに嬉しい。資格は一級建築士、建築主事である。

ドミニカ共和国の気候や文化の紹介

ドミニカ共和国はカリブ海に浮かぶイスパニョーラ島の東半分以上を占める。面積は約4万8千km²、九州を一回り大きくしたものである。西には最貧国ハイチがある。ラテンアメリカと言うとサッカーを思い出させるがここでは、野球が大変盛んだ。そんなこともあって大リーグにはドミニカ共和国出身のプレーヤーが多い。最初の印象はミニアメリカ、そう思った。人々はラテン気質でいたって陽気だ。メレンゲやバチャータに代表される音楽や踊りが大変盛んである。人種的には混血が4分の3を占める。気候は亜熱帯気候である。人口は約900万人、公用語はスペイン語である。

活動や生活について

私の指導科目は都市計画である。よく聞かれる、「都市計画ってどんなことをするのですか。」と、「都市計画とはまちづくりだ。」と答えている。人が人として暮らしていく町はどのようにすれば快適で住みやすい町になるのかそのしくみをつくり守っていくことだ。

ここサントドミンゴ市は大きな都市である。人口250万人、面積1400km²を擁するカリブ海地域でキューバのハバナについて大きな都市である。(否、あったと言った方が正しい。)都市への人口集中は年々ひどくなっておりこの都市圏には全体の三分の一から四分の一もの人々が暮らしている。そんなサントドミンゴ市は2002年5つの都



高架を走る地下鉄、川の上を横切る地点から地上の高架を走っている。

市に分割された。政府機関も多く最も都市化の集中した地域をサントドミンゴ市特別区として位置づけた。そして、その周りの都市を、サントドミンゴ北市、サントドミンゴ東市、サントドミンゴ西市、そして一部をボカチカ県へと5つに分割された。私の配属先である特別区は人口94万人、100km²である。そして全体で、サントドミンゴ都市圏と称している。今ここで急がれるのは、都市計画に関連する法律の整備である。私はそのための指導に赴任している。

2008年の8月選挙で当選し2期目となった市長は、2015年のサントドミンゴ市の将来像という都市戦略を掲げている。お手本はニューヨークのようである。ここサントドミンゴに着いていくつかなじみのある通りの名前にほっとした。東西を貫く幹線道路は、ケネディ(ジョン・エフ・ケネディ)通り、ワシントン(ジョージ・ワシントン)通りと称する。また、南北に走る通りは、リンコン(エイブラハム・リンカーン)通り、チュルチュル(ウインストン・チャーチル)通りと言う。いずれも歴史に名を残し日本にもなじみが深い人物から取ってある。

新大陸で最古のまちと自負するこの都市を有名にしている、そして特に力を入れているのが観光である。サントドミンゴ市特別区の一部は旧市街(ソーナコロニアル)と言われ、1990年にユネスコの世界遺産に選定された。コロンブスがアメリカ大陸発見の端緒となった植民都市で当時の面影をしのぶ多くの建物が残っている。この世界遺産、日本が批准に加盟したのは先進国で最も遅く1992年だった。その翌年、姫路城、屋久島、白神山地と法隆寺地域の仏教建築物が世界遺産に選定された。大きな関心を集めたことは記憶に新しい。昨今では、この世界遺産という言葉、日本語にすっかり定着し、世界遺産検定までするようになった。そしてひとつのステータスの感すらある。南米ペルーのマチュピチュはすっかり有名になり海外旅行先の日本人で最も人気のある観光地となっている。

そしてもうひとつの大きな話題は、やっと開通した地下鉄だ。この国初めての地下鉄で計画当初から国民の大きな関心を集めた。官庁街の市役所前からイサベル川を隔てた隣のサントドミンゴ北市まで、14.5km、16の駅がある。所要時間は約30分。ちょうど川を越える手前から地上の高架を走る。それぞれの駅の名前はこの国にゆかりの人物から取ってある。

2008年12月23日開通し、1月6日までの試乗期間は無料で多くの人々が利用した。その後20日間ほどの休止期間を経て、1月30日再開し営業操業となった。運転は朝の6時半から夜の10時半頃までとなっている。料金は一律で20ペソ(約60円)である。公共の市内循環バス(オムサと呼ばれている)が5ペソもしくは10ペソであることから考えると少し高い。庶民の足として定着するのかそれが心配だ。



地下鉄メトロの地図で各駅のプラットフォームなどにある。わかり易い。



地下鉄。とても発展途上国のように見えない近代的なつくりだ

ここでは公用語のスペイン語が大変大事である。日常生活には欠かせない。カウンターパートが英語が堪能なので助かっているが、毎日がスペイン語の語学研修のようで苦労していると言うのが正直な感想である。